公開シンポジウム

「全カリ・総合Bの可能性を探る」

日　時：1997年11月18日(火)16：30～19：00
場　所：立教大学九号館大教室

〈シンポジスト〉 上村　達男氏（早稲田大学法学部教授）
西平　　直氏（東京大学大学院教育学研究科助教授）
鈴木　秀一氏（本学経済学部教授，本年度総合B担当）
服部　孝章氏（本学社会学部教授，本年度総合B担当）
本間　隆一君（本学社会学部産業関係学科1年）
竹内　一貴君（本学法学部法学科1年）
福井　康修君（本学法学部政治学科2年）
〈司　会　者〉 佐々木一也氏（本学文学部助教授，全カリ総合専門委員）

Ⅰ　はじめに

所　ご多用のところをお集まりくださいまして，ありがとうございました。とりわけ，上村，西平両先生には，先に本学にいらして全カリの準備をお助けくださった縁を頼っての依頼でありまして，おそらくご迷惑をおしてのご出席であろうかと思います。たいへん恐縮いたします。

企画の趣旨は，司会をされている総合の専門委員の佐々木先生からこの後，お話がありますので，そちらにお任せしますけれども，総合Bは，私も現在一つ担当しておりますし，また，これが生まれる過程ではずいぶんコミットいたしました。

そこでのポイントは二つありまして，すでに旧一般教育課程に総合講座という現在のものに似たものがあったわけですが，それに対する反省がありました。一つは，常に複数の教員が教室におられることが必要であろう。ただリレー式にやっていったのでは総合にならない。これが1点です。それから，そのためにも，マンパワーを贅沢に確保しよう。部長会にお願いして非常勤コマ3名分を使えるようにしてもらうという，この2点に重点を置いて実現したわけです。

そのとき考えていたことが現実にいったいどう実を結んだのか。自分が担当しているのは「科学と人間」という総合Bでありますけれども，それについても実はいくらか，やってみて頼りないところがあります。他の総合Bではいったいどうなっているのか。たいへん興味ある点でありまして，きょうはそういう立場で，できれば部長とし

ての立場を離れて，遠慮なく発言もしたいと考えております。そういうわけで楽しみにしております。

いささか勝手なことを申し上げましたけれども，ご挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございました。

佐々木　どうもありがとうございました。さて，これからお話を進めていきますけれども，この会の流れとしては，まず私から総合Ｂの全体にかかわるお話を若干させていただきます。それから，ここに並んでおられる方々に順にお話をしていただきます。まず最初にパネリストの先生方，そして，きょうは特に学生さんを３人ほどお招きして，本音でこの授業を切っていただきたいという企画でもありますが，まずご紹介させていただきます。

経済学部経営学科の鈴木秀一先生です。

社会学部社会学科の服部孝章先生です。

現在，東京大学大学院教育学研究科で教えておられる西平　直先生です。西平先生は昨年度末，すなわち今年(1997年）の３月末まで立教大学の学校社会教育講座で教えていらっしゃいました。

上村達男先生です。上村先生は現在，早稲田大学にお勤めですけれども，上村先生も西平先生と同じように今年の３月まで本学の法学部で教鞭を執っておられました。お世話になった学生さんもいらっしゃると思います。

そして，法学部１年の竹内一貴君，法学部政治学科２年の福井康修君，社会学部産業関係学科１年本間隆一君です。

順番としては，本間君，鈴木先生，竹内君，福井君，服部先生とお話しいただきまして，最後に上村先生と西平先生に，半分学外といったら失礼かもしれませんけれども，立教大学におられて今は学外にいらっしゃる，そういうお立場から立教大学が始めた新しい企画についていろいろご意見，ご指示などいただきたいと思います。

最初に，僭越でありますが，私からこのシンポジウムを開きました趣旨，そして，テーマであります全学共通カリキュラム総合Ｂの概要について説明させていただきたいと思います。

全学共通カリキュラムに限らず，大学の授業一般については，カリキュラムの展開とそれが実際にどのように行われていたかという評価がたいへん重要であります。総合Ｂは新しく，全く新しい授業形態として本年度から始まったものですから，なるべく早くその点検をしたいということで，本年度，全学共通カリキュラム運営センターとして行われるシンポジウムの主題とさせていただきました。

総合Ｂという授業科目は，先ほど部長の所先生からもご説明がありましたけれども，これは全学共通カリキュラム総合科目のいわば目玉として新しく開設された授業科目と言うことができ

ます。

ご記憶もまだ新しいかと思いますけれども，今年の３月までは一般教育課程が行われておりまして，そこで一般教育のいわゆる３分野，人文・社会・自然の科目が行われておりました。それぞれの科目は，たとえば哲学，キリスト教倫理，物理学，化学といった名前が付けられておりました。これは旧来のカリキュラムでの学問の名称でありますけれども，そういう名前の下で１人の先生が１年間を通じて講義をして，最後にあるいはその中間で試験をして４単位を与えるという授業形態でした。

これについてはいろいろな意見がありました。もちろん有益であるという意見もありましたけれども，必ずしもそういう好意的なものばかりではなく，否定的なものも数多くありました。その否定的なものの一つに，これは私の私見ですが，こういうものがたぶんあったであろうと考えられます。

現在は全カリ，全学共通カリキュラムですが，一般教育科目と専門教育科目――各学部学科の行っているカリキュラムとの関係は，いかなる位置をもって行われているか，全く明らかではなかった。そして，むしろ旧一般教育課程では専門科目と競合し，あるいは専門科目と競争するような形で，ある学問体系が専門教育科目とは別のルートで行われているという傾向がありました。それがもちろんよく働くこともあったかもしれませんけれども，学生さんにとっては混乱の元にもなっただろうと思います。

全学共通カリキュラムでは，その考え方を改めまして，むしろある知識体系の一部を担った科目を展開するのではなくて，専門科目で勉強する学問分野が，自分が卒業して将来一社会人あるいは研究者となった場合にどのように生かされるかという視点を確立するための科目と位置づけられてきたわけです。

そのためには，もちろん専門で勉強している分野以外のことを縷々学習して知識を仕込むということも必要ではありましょう。しかし，大事なのはいろいろな知識を雑学的に知識を集めることではなくて，むしろその学問がどう生かされているかという，学問を実際にやっている教員たちが自分の学問の意味とか意義をできるだけ学生に訴えることだと考えて、その実現を目指して改革されたわけです。

そのなかで、個人の教員が１人で特定の科目の知識を展開するという科目ではない，全く新しい可能性を持った科目の開設が望まれたわけで，そういう意味で登場してきたのが総合Ｂだということです。

先ほど所先生がおっしゃったように，複数の教員が同時に担当・出席をして，共同で授業を行う。

なぜそういうことを行うかというと，特定の分野の知識を学生に伝えるということではなくて，実際に自分の専門から離れた場合に，たとえば勉強した

学生が社会に出た場合には学問の専門の領域で生きるわけではないわけですが，そういった場合に学問がどのように社会と切り結んで生きていくのかを実地に見せる。そういう意味があるんですね。

２人の先生が壇上で話をしますと，専門分野が違いますので，自分の分野だったら当然通じる話が相手の先生には通じないということがまま生じるわけです。そういう場合に，どうやって通じさせようかということでお互い努力するわけですけれども，そのさまを学生が見ることによって，学問の有効性と限界，あるいは他分野において学問が生きていくにはどういう工夫が必要なのかということを実地に見るわけです。しかも，そこに学生が討論で割り込んだりなどして，学生と教員とが渾然一体となって，そこで専門科目にあるようなきちっと体系づけられた知識を積み重ねていくという意味合いではない，学問の新しい体験ができるわけです。

そういう効果を高めるために授業形態は非常に多様でありまして，複数の教員が常時出るような形というのが本来のイメージで始まっておりますけれども，学外の先生もお呼びしますし，大学の外へ出るという授業もあります。あるいは，教員が担当しているような講義以外の，学内での催し物，講演会，シンポジウム，映画会，展覧会といったものも取り入れて，教員が共にそうした行事に参加して学生と一緒に考えて，教員も学びながら，またそれを授業にフィードバックしてお互いに高め合う。そんなことが多様に展開されております。

所先生がおっしゃったように，運営センターの努力で非常勤コマが使えるようになりまして，教員としては若干負担になる授業科目であるわけですけれども，先生方の負担を軽減して何とかもり立てていこうということが行われていますが，まだ予算規模の関係で十分な科目数が展開されているとは言えません。しかし，多少冒険的に行われている科目が並んでおります。本年度から学生さんに出ていただいて，それがどのように目に映っているか，われわれ担当している教員にはたいへん興味深いものがあります。

それでは早速，授業に参加してくださっている学生さんに，まず口火を切っていただこうと思います。トップバッターは産業関係学科１年，本間君です。本間君は，鈴木先生が担当しておられる「企業社会と豊かさ」という科目の，前期の「国際化する日本企業」というサブテーマで行われた授業に参加してくださいました。その本間君から総合Ｂについてお話ししていただきたいと思います。では，よろしくお願いします。

II 問題提起

本間　隆一君

本間　ぼく自身，日本の企業の仕組みや経営システムなどに興味がありましたので，日本の企業のよい点や豊かに経営をしていくための改善点などについて複数の先生が交代で授業を行っていくということで，多角的ないろいろなビジョンから日本の企業のシステムなどがいろいろ学べた点が，自分にはよく感じられました。複数の先生が，しかもいろいろな学部の先生が授業を行いますので，経済学や経営学だけでなく，法学，社会学的な問題も企業のシステムから見出せたことは，やはり「企業社会と豊かさ」の授業を履修してよかったと思います。

問題と思った点は，やはり「企業社会と豊かさ」は総合B群の人数制限科目ということで，抽選によって受講者を決めますので，本当に勉強したい人が授業を受けられなかったりするという弊害が起きてしまうことが，ぼくには問題に思えました。やはり授業を履修したいと思う人に簡単なレポートのようなものを提出させて，本当に勉強したい人だけを選ぶようなシステムがあればいいなと思いました。

総合B群のような科目と高校の授業とをちょっと比較してみたんですが，大学の授業は受け身だけでなく，自分から学ぶ姿勢が強く求められるものだと思いました。ぼく自身，レポートを書くために文献などを調べていくと，授業で学んだことをより深く理解できました。いつも決まった先生が一つの教科書を説明していくといった単調さが，総合B群のような複数の先生が講義を展開していく授業にはなくて，一つ一つの講義がとても新鮮に感じられたことが，高校の授業と比べてぼくにはすごく違っているように思えました。

ぼくが「企業社会と豊かさ」の授業を受けての感想は以上です。

佐々木　ありがとうございました。もう少し何か言い足りないこともあるんじゃないかと思いますけれども，今度は担当してくださっている側の立場で鈴木先生からお話を伺います。

鈴木　本間君，どうもありがとうございました。何か励まされて，たいへんうれしかったです。担当側からコンセプトを簡単に申し上げて，少しいろいろなことをお話ししたいと思います。

総合Bということで，どのようにして専門教育と一般教育の狭間を埋めたらいいのだろうかと考えていったわけ

ですけれども，そのなかで受講生に対するコンセプトとして，私は参加と自主性ということを教室でもいつも言ってきました。とにかく参加する講座なんだ，ふつうのとにかく出席票だけ集めたりというような受け身では，なかなかいい成績や単位が取れないよということを言ってきました。

それに応えてくれる学生がとても多かったので，私以上に，外からお呼びしている先生，あるいは他学部の先生に非常にやり甲斐を感じていただけたと思います。

また，講師の先生たちとの調整で，私がコンセプトとして，このようにお願いしますと言ってきたことが一つあります。それは，理論よりもむしろご自分で見てきたことを話してください。経験談のようなことを中心に話して，それに，必要であれば理論をお願いしますということで打ち合わせを詰めてきました。

なぜかといいますと，どうしてもわかりづらい話になると，つい何ヵ月か前まで高校生だった諸君ですので，何となく最初の１～２ヵ月でいやになってしまって出足が鈍るということもあると思います。それで，とにかくビジュアルに，見てきたことを話すということをお願いしてきました。

それと受講生のコンセプト，参加と自主性というのがうまくマッチする機会が何回かありまして，12～13回のうち全部がそうだったわけではないんですが，控えめにいっても３回ぐらいは

鈴木　秀一氏

そういう教室のなかの盛り上がりというかノリというか，そういうものを感じたことがあります。

だいたい毎回，終わってから学生諸君が演壇のほうに来て，講師の先生たちや私を囲んで，平均15分から20分ぐらいでしょうか，質問をします。たわいのない質問もあれば，かなり高度な質問もあって，中央大学の，昔からお付き合いいただいている伊藤先生を非常に驚かせて「うちの法学部の４年よりいい質問をした」というお話も聞けました。半分お世辞でも非常にうれしかったです。

そのように参加してもらう，自主性をもってこちらへ来てもらって，こちらから話を引き出してやっていく。レポートはだいたい３回か４回，４回だったかと思いますけれども，それ以外にも１本，学期末に出すという形で，各先生に見ていただいたのをまた私が見て総合評価をしていくという形でしたから，学生諸君にはかなり大変な作業の要るものだったと思います。

最初来られた受講希望者が330～340人だったと記憶していますけれども，とにかく階段教室がいっぱいになって，

廊下まで溢れてというので，やむを得ず抽選を行いました。先ほど本間君が言ってくれたように，何か別の方法がないかなと後期も思いましたが，それは今後の課題だと思います。

前期は，本年度は国際化をテーマにやりました。多様性という意味で，それぞれの大学で先生方がお持ちの講座名を挙げてみますと，中小企業論，組織論，商法，国際経営論，経済政策論，社会学という形で非常に多くの先生方が来て，そして，いま自分がいちばん関心をお持ちのことを，日本企業が国際化していくときどういう問題があるのか，それは君たち自身の問題なんだという形で問題を投げ掛けていただきましたので，非常に刺激的な授業にはなったと思うんですが，夏休みにちょっと反省した点は，なかなか全体のつながりが難しかったのではないかということで，後期はちょっと違うやり方をやっています。

後期は，「企業社会と豊かさ」というテーマですので，生活のほうの豊かさ，生活の質の問題とか，経済成長が終わった後の成熟社会のなかでどうやって生きるかという問題に話が移っておりまして，そのなかで経済政策の先生と社会政策の先生，それぞれに高齢化や医療制度の問題，現在は女子労働の問題，そうした問題を投げ掛けていただいています。私なりに毎回ちょっとコメントしてから講義に入っていただくんですけれども，前の先生とのつながり，前の講義とのつながり，そして全体とのつながりをできるだけ説明するようにして，毎回の講義に入っています。

ですから，その点，後期のほうが学生諸君の理解といいますか，流れを追いやすくなっているのではないかと思っています。

そのようにしてやっていて，いちばんうれしいのは，先ほどの本間君のような感想が聞けるのもうれしいんですけれども，モグリの学生が後期はだいぶおります。だいぶといっても，私，顔がわかるのは5人ぐらいしかいませんけれども，ああ，君，前期取ったよねという人たちが何人かいて，そのうちの2人ぐらいとは非常に仲がよくなりました。

ある先生に「これは本当に教師冥利に尽きますね」とおっしゃっていただきましたけれども，そういう学生がぽつぽついるというのは，非常にアカデミックではないかと私は思っております。単位にも，成績にも，何もつかないんですけれども，わざわざ来ている。この間，Eメールをお互い教え合って，Eメールなどで文通をしておりますけれども，そういう人間関係は，ふつうはあまりできないですね。

一つショックだったのは，経済学部で経営組織論を教えていて，あるときにある学生から，立教では先生は教壇の向こう側の存在なんですよと言われたんです。彼はもう忘れてしまったでしょうけれども，私のほうはずっと覚えていまして，これはどうしようもな

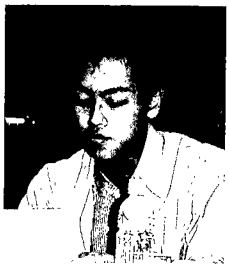
いな，何かしなくちゃいけないのかなと自分でも寂しく思いました。

確かに話もしない，顔も知らないで卒業していく学生がほとんどです。それは仕方がないといえば仕方がないんですが，何か人格的なつながり，名前と顔と成績だけではないつながりを，こちらもどこかで求めているところがあります。

それが，総合Bですと，複数の先生たちで，たとえばあと1人先生がいらっしゃると，それだけでも質問に来る学生が倍になります。そういうところからきっかけがつかめる。先生と学生とのコーディネートをする役が私ですので，そういうところでもまたきっかけがつかめます。いつも講義していると，自分のところへ質問に来て答えてという，いわば当事者ですので，もうちょっと違う立場で余裕が出てきたように思います。それで少し，まだ何人かの学生ではありますけれども，ふれあいといいますか，人格的なつながりが出てきたのではないかと思います。それがいちばん，やっていて本当にうれしい，楽しいところです。

反省点としては，先ほど申し上げましたのでもう繰り返しませんけれども，私のお話としては以上です。

佐々木　どうもありがとうございました。続きまして，今度は服部先生がお持ちの「メディアとスポーツ」の授業に参加してくださった竹内君と福井君からお話を伺いたいと思います。では，竹内君，お願いします。



竹内　一貴君

竹内　ぼくがこの授業を取った動機は，メディアとスポーツ，両方に興味がありましたし，青島さん，西田さんといったテレビでよく見かける人の話を聴けるという好奇心からでした。履修する際には，A群，B群は特に意識しなかったんですけれども，授業を受けてみて，総合B群はA群と違ってある一つの特定の分野について専門的に学ぶのではなくて，いくつかの分野，ぼくが取った授業の場合はメディアとスポーツを絡めた広い範囲を学んでいくものです。A群，B群どちらがいいかというものではないんですが，両方とも必要であると思います。

どちらかというとA群は高校時代の授業の形式と同じような感じだという印象を受けましたが，B群は教師が複数いる点や内容，授業の進め方など，すごく新鮮に感じられました。

「メディアとスポーツ」の授業では，教師は3人でしたが，三人三様の視点から見ているので，聴講していてとてもおもしろかったです。青島さんは野球選手の経験を生かしてスポーツ界か

ら，西田さんはメディアの側から，服部先生は研究者の立場から見ているので，すごくためになりました。

しかし，逆に，教師が複数ということで，あまり打ち合わせというものが感じられず，１回の授業で３人が別々のことを話していたような気がします。３人がそれぞれ別々の講演会をしているという印象を受けました。とても話がおもしろくて，聴き入ってしまうので，授業を受けているときはこれでいいのかなと思っていたんですけれども，今になってよく考えてみると，少し変な気がします。

人数の問題ですが，少し多過ぎたような気がします。ただでさえ教師とのコミュニケーションはとりにくく，最後に質問の時間がありましたが，かなり限られた人が質問していました。授業終了後に先生方を引き止めて質問を浴びせる人もいましたが，それを授業のなかで討論という形にはもっていけていないような気がします。

でも，この授業を聴いていてとてもためになるし，楽しかったので，学生を惹きつけ，学生が学ぶにはそういうものがいちばん必要だと思います。３人とも話し方が上手で，また聴きたいという気にさせてくれました。いろいろまだ改良点があると思いますが，こんなおもしろい授業が続いて行われればいいと思いました。

以上です。

佐々木　ありがとうございました。福井君からもお願いします。

福井　ぼくも竹内君と同じ「メディアとスポーツ」という科目を取ったんですけれども，なぜこの講義を受講しようと思ったかというきっかけは，やはりミーハーな気分がいちばん強くて，あえて敬称を外しますが，青島健太を見られるというのがうれしくて……。

多くの人もたぶんそれが目的で来たんじゃないかな。だから，最初の授業のときには，あの５号館の教室が目一杯になって，テレビカメラも入っていたんですけれども，ぼくは幸いにしていちばん前で聴けたんですが，本当にもうギューギュー詰め。関心の高さというか，やはりみんなもさほど深く検討して，「メディアとスポーツ」を取ってこれこれこういう話を聴きたいんだとか，こういうことを学びたいんだというよりも，ちょっと有名な人がいるからみたいな，そういう気分のほうが強かったんじゃないかなと思います。

ぼくは最初に配られる履修要項を見たときは総合Ａと総合Ｂの区別もあまりつかなくて，でも，総合Ｂのほうは先生が３～４人複数でやるという。だから，いろいろな多角的な視点で話が進むのかなと思って，そういうところはけっこう興味深いなと思いました。

実際，講義を受講しての感想，もしくはよかったところ，悪かったところなんですが，竹内君が言っていたように，３人の先生方がとても話が上手で，やはり引き込まれる授業だったと思い

福井　康修君

ます。「メディアとスポーツ」は，たいがい９号館の教室で授業があったんですけれども，ぼくは友達と２人でちょうどあのへんに座って，かなり前のほうでずっと聴いていました。

青島さんの話は，実際に野球選手として歩んできた道を振り返りながら，青島さんはもちろん大学ではとても活躍して，東芝に入ってからもとても活躍した方ですけれども，ヤクルトに入ってからはちょっと挫折というか苦しい思いもした，そういう経験を語られて，生でそういうことが聴けるのはめったにない機会ですから，とても実感がこもっていて伝わるものがありました。

西田さんは，現役のアナウンサー，いや，今は確かＮＨＫで解説委員になったのかな，でも，やはり第一線で活躍されていた方なので，メディアを通して伝える側でずっと活躍されていたということで，やはり現場の雰囲気とか，どんなことがあったかとか，後ろに映るもので説明されたりして，とても楽しかったんですけれども，やはりプロのアナウンサーはすごいなと思ったのは，５分なら５分，10分なら10分と講師の先生方に割り振られた時間がたぶんあると思うんです。その時間をきっちり守るということなんですね。時計をちらちらと見ながら，必ず時間内に収めて話をされる。特にスポーツの中継などをされるアナウンサーだと，時間を読み間違えるのがいちばん怖いと思うんです。読み間違えないように，10分なら10分，15分なら15分という時間内にきっちり当てはめて，かつ中身のある話をされるというのが，とても印象に残りました。

服部先生は，やはり学問的というか研究されている立場から，たとえばサッカーくじの問題なども授業中に話されました。先生はどちらかというと批判的な立場だったんですけれども，そういう立場からたくさん発言されていました。ぼくは日本がワールドカップに出場を決めたのでちょっと気持ちが変わったりしているんですけれども，でも，サッカーくじは，前期には反対だったので，先生の話をとても興味深く聴きました。

やる気のある人，先生の話を聴きたいという意欲のある人は前のほうで聴いているんですけれども，意欲のない人，適当に単位だけもらえればいいやという人は後ろのほうに固まっていて，あまり授業に乗り気でない。ただ座っていればいいや，話が聴ければいいやで，最後のほうはかなり私語でうるさくてザワザワ，ザワザワしていたのがとても気になりました。

総合Ｂのような授業は，たくさんの

人に門戸を開いて聴いてもらうという利点があって，ぼくはそれは決して悪いことではないと思うんですけれども，より高い内容のことをやるとか，もっともっと学生が授業の趣旨を理解して，もっと講師の先生方と学生の間の関係を埋めようとするならば，やはり人数を減らしたほうがいいと思います。でも，これはいろいろな意見があると思うので，いろいろな人の話を聞いたり，アンケートをとるなりして決めなければいけないことじゃないかなと思いますが，やはりちょっと人数が多過ぎたかなという印象を受けました。

それから，３人の講師の先生方の話はとても楽しかったんですけれども，もちろん忙しい先生方ばかりなので，３人の先生方の間であまり話し合いがとれていなかったのかな，と思いました。一人ひとりの先生の話はとても楽しいんですけれども，ちょっと統一感がなかったかな。だから，講義が終わると，きょうは何の話だったのかな，楽しかったけれども，あまり内容が残っていないみたいな，きちんとノートをとっていた人は残っていたと思うんですけれども，ただ漫然と聴いていた人はおそらく何も残らなかった，もしくは残ったとしてもあまり価値のあるものではなかったかなという気がします。

でも，総合Ｂという授業はとてもユニークな授業で，とても中身があると思うので，ぼくはこれからも続けたほうがいいと思います。人数のことなどは，やはりいろいろな人に聞いて，改めたり考え直したりしなければいけないところではないかと思います。

以上です。

佐々木　ありがとうございました。いろいろ注文も出ましたけれども，それでは，担当教員のほうで服部先生，お願いします。

服部　いま竹内君と福井君から言われたなかには，耳の痛いことがたくさんありました。沼澤秀雄先生がコーディネーターという形で最後にまとめる，あるいは最初にきょうの話はこういうことだという形で講義をすすめてきました。２人から出たなかで共通していた問題は，西田さん，青島さん，そしてぼくの話がばらばらであったのではないかということですけれども，打ち合わせは毎回していたわけです。

半期のスケジュールは全部立てていたわけですが，授業が終わった後，次回はこういう形で話をしようということはだいたい食事をしながら，あるいは，たまたまお２人が忙しくて，もしできない場合には，沼澤先生が中心になってファックスでやりとりをして講義の前日までには，それぞれの講師の中心的テーマは決定していました。とりわけ青島さんと西田さんの話が本当にうま過ぎるというところがあって，ばらばらに聞こえたのかもしれません。さらに，ぼくの役割として，西田さんと対立するといいますか，議論を巻き

起こす意味で対立しようとしたために，視点がぼけた。その部分でぼくが反省しなければいけないかなと思います。

打ち合わせが感じられなかったとしたら，もっとわれわれ自身も反省しなければいけないわけですが，実際には打ち合わせがあって，半年のスケジュールとして，スポーツとは何か，アマチュアリズムとプロフェッショナリズムに始まり，サッカーくじがあり，オリンピックの問題をとりあげ，メディアとスポーツを考えていく流れはあったと思います。

ただ，「メディアとスポーツ」というのは切り方によってどうにでも切っていけるといいますか，ちょうど授業の期間中に横浜と大阪がオリンピックに立候補してどうのという議論があって，それはどういう形で決まるか，西田さんが，それこそ例のポインターペンを使って，用意された図表などを示しながら解説されました。西田さんはいつもこれは楽しいといって授業で使っていました。講師のプレゼンテーションの仕方の相違がばらばらな印象を学生にあたえたのかも知れません。

われわれ教員の参加は，先ほど所先生がおっしゃったように，全員が参加するものだとはもちろんぼくも認識していたんですが，ぼくは全回出るんだという認識はまるでなかったんです。でも，４人が全員，ほぼ全ての講義に出たと思います。もちろん沼澤先生は出られた。外部のお２人の先生も１度ぐらいはそれぞれ出張か何かで出られ

服部　孝章氏

なかったことがありましたが，たとえばいま羽田についたばかりだけれどもこれから向かうという形で，授業中には必ず来るということで，４人が出て，先ほど２人が言ったような形の話が続けられたわけです。

確かにこの９号館の大教室へ移ってから，この教室が７～８割方埋まるわけですね。福井君が言っていたように後ろのほうはやかましくて，西田さんが「だんだんだんだん大学の教室になってきた」と表現したんです。つまり，最初，５号館で行っていたときはものすごい熱気あふれる，階段も溢れるぐらい。参加者があのときは500人ぐらいいたのかな，よくわからないですが，すごい数でした。この教室に来ても，そのぐらいの数は変わらなかったわけですが，段々，段々「青島健太ファンが飽きてきたのかな」ということを，私自身もその状況を目にして思いました。

そういう意味では，そういう部分をどうするのかというのはわれわれの役割なんでしょうが，ミーハーと２人とも言っていたけれども，そういう青島健太ファンの人たちが青島さんの話で

はなくて青島健太の姿を見にくるみたいな部分は否めないだろうなと思います。しかし，青島さんと，西田さんは，それぞれその回ごとに与えられたものはきちんと提示されていました。

学生との関係でいいますと，必ず沼澤先生が最後にまとめられる形で討論を促すわけですが，竹内君が言ったように，限られた人が質問するという状況が確かにあった。それは間違いないんですが，しかし，それがどういうことを意味するかというと，参加している人たちの濃淡があまりにもはっきりしていたんだろうと思います。つまり，この授業で何かを聞き取って，何かを得て帰ろうと思っている学生が確かに数人，他学部の学生でもぼくが顔も名前も覚えてしまった学生が何人かいます。そういう人たちが絶えず質問をしてくれる。そういう形で展開していったことはとてもよかったので，本来はそれが波紋のように広がっていくことを期待したんですが，必ずしも広がらなかった。

確かにこの授業はいちばん最初，青島健太さんの出演していたＴＢＳの〈十番勝負〉のテレビカメラが来て，カメラが回り始めて，ライトがついた途端に学生のひとりが，ライトがまぶしいので消してくれないか，という要望から始まっていった。そして，青島さんがそれについて答えるという形で「メディアとスポーツ」は始まりました。そういう意味ではすごく質問が出やすいし，教員の側と学生との間でフラットに議論ができるのかなと期待していたんですが，必ずしも十分ではなかったという反省をしなければいけないと思っています。

そして，まとめとして考えるのは，とりわけ西田善夫さんは，ぼくが札幌に住んでいた小中学生のときに，彼のアイスホッケーの中継をいつもアイススケートをしながら同じスケートリンクの後ろのほうで聞いていたんですが，本当にうまいし，あのしゃべりはどうしてできるのかなと，ぼく自身がファンだったんです。ぼくも西田さんのお話を学生と同じレベルで聴いていた部分があります。

しかし，役割として西田さんに嫌われることを，気に障ることを毎回必ず発言する。ＮＨＫのコマーシャリズムの問題，ＮＨＫがスポーツをダメにしていっている部分を言う。そんなことがありましたけれども，その後もいろいろと交流があります。

そういう西田さんとか青島さんが講義の準備そして忙しいスケジュールを調整して必ず教室にやってくるという熱意を感じましたが，それにくらべ，学生の反応はあったけれども，では，学生の主体性があったのかと考えると，こういうテーマで話して欲しいというような形で西田さん，青島さんに何か意見がないかという形で，沼沢先生が毎回プレゼンテーションをしたわけですけれども，必ずしも主体的な要望、要求がありませんでした。

そういう意味では，確かにきちっと

固まったカリキュラム，あるいはシラバスというのが一方ではとても重要なんですが，この「メディアとスポーツ」は「いま」を考えるうえで，いろいろなトピックスをとりあげざるをえない面があります。

ですから，学生諸君の反応が大切です。要望を提示する学生によって動いていける，動かざるを得ない授業だったと思うんです。その意味では，学生の主体性とか，問題提起がもっとあってよかったんじゃないかなと思うんですね。

さらには，学生からの提言として，その先に総合Bの科目群でこういうものを開いて欲しいとか，あるいはこんな形での授業形態を望むとか，そういうことまで全カリの総合Bは種を播いたのではないかと期待してます。「メディアとスポーツ」を受講した学生がぜひそのような学生の主体性，自分たちが大学の主役なんだということに気がついて，もっともっと積極的に要求をしてくれたらなと思いました。

以上です。

佐々木　ありがとうございました。では，上村先生，西平先生に大いに総合Bを切っていただきたいと思います。それでは，上村先生からお願いします。

上村　私は先ほど佐々木先生からご紹介がありましたように，この3月まで立教大学におりまして，全カリ委員をしておりました。中におりますと，

上村　達男氏

こんなに大変だったんだとか，ちっとは褒めてもらってもいいんじゃないかと思ってもなかなか言いにくいだろうと思います。私はいちおう外へ出ておりますので，言いやすいんじゃないかと思っています。全カリは、最初のスタートのときから、本当に時間をものすごくかけて，まさに立教大学が叡知を結集してつくったカリキュラムだと思います。

だいたい他大学で何かモデルのようなカリキュラムができると，それをちょっと変えて真似するといいましょうか，そういう形が多いんですけれども，まさに立教大学の全カリはものすごく時間をかけて，大変なエネルギーを結集して……。まあでき上がってみればこんなものかということかもしれませんけれども，私自身もなかにいて，これは大変な仕事だなと思いました。皆さん議論が好き過ぎて，夜遅くまで，何でこんなに時間がかかるんだろうと思うことがよくありましたけれども，それにしても，一つの目標に向けたエネルギーは大変なものでした。中身も複雑ですから、講義要項がよく間違いもなく，あるいはあったのかもしれま

せんが，あれだけできたなと思っております。

私は言語のほうを担当していたんですが，言語のほうは全カリではそれ自体が一つの目玉でありまして，コース制とか，半期制とか，いろいろあるわけです。言語はまずこういうカリキュラムがいいという理念からスタートして，しかし，人の問題がいろいろ出てきますし，お金の問題も出てきます。人をどうしようかというときに、いろいろ批判もありましたけれども，新しく嘱託講師などという制度をつくってみたり，そういう形でカリキュラムをつくってきたわけです。

総合のほうは，はっきりいいますと，一般教育課程を引きずっておりますので，カリキュラムからその次に人をとはなかなかいきません。やはりある程度，人を考えながらカリキュラムも長期的に直していくといいましょうか。そういうことをしていかざるをえなかったと思います。

総合のほうは佐々木先生がたいへん大活躍されまして，いろいろカリキュラムをつくられたわけですが，やはり私が最初に委員になったときに率直に思ったことは，どうもコース全体が人文中心であり過ぎるという感じを受けました。逆をいいますと，私は法学部ですが，法学部や経済学部の協力がそれだけ乏しいということなんだろうなとも思って，法学部のほうでもいろいろと申し上げたりしたこともあったわけです。

スタートの時点である程度カリキュラムに偏りがあっても無理もないというところがありますけれども，そうしたなかで，総合Ｂはやはりそれを補う総合としての目玉といいましょうか。そういう位置づけになっていると思います。

先ほど専門と一般の関係という話が出ましたけれども，専門につなぐ一般というのも当然あります。私のイメージとしてはむしろ，たとえば私は会社法とか証券取引法を専門にしておりまして，鈴木先生とちょっと近いんですが，文学部の学生に，なぜいまこんなに企業社会では不祥事が次から次へと起きるのだろうかとか，ビッグバンと言っているのはいったい何なんだろうかとか。法学部や経済学部の学生はある程度専門でやりますけれども，文学部の学生がそれを知るべきだ。知って欲しい。

私は前に専修大学にいたことがあるんですが，そのときもやはりこの種の総合Ｂのような科目がありましたけれども，政治の先生が中心になってやっておりますと，必ず「国際関係と政治」とか「戦争と平和」とか，そういう決まった題ができるわけです。

しかし，私が会社法とか証券取引法をやっていますと，たとえばいまいろいろ犯罪が起きたり失業があったり出向があったりします。バブルが崩壊したことがそういういろいろな問題を生んでおりますけれども，バブルがなぜ生まれたのかというと，経済的な要因

もありますけれども，制度的な要因がものすごく大きいと思うんです。1920年代のアメリカは，まさにバブル花盛りだったわけですが，それが崩壊してみたら国全体の富が1/5か1/6になってしまった。しかし，国全体の富がピークのときの約束を実行しなくてはいけない。そうなると何をするかというと，植民地支配に出ていくとか，戦争が起きるとか，犯罪が起きるとか，失業が起きるとか。そういうことで私はまさしくそういう問題が「戦争と平和」だと思ったものですから，私にやらせろと言ったんです。

そうしたらダメだと言われて断られたんです。冗談じゃない，「戦争と平和」というのは，国際関係とか国際条約とか政治学とか憲法とか国家学とか行政学とか，そういう高邁なところでやるものであって，証券取引法とか商法とか，そんなやつらにしゃべらせるものかという感じ（笑）。これはちょっと大げさですけれども，そういう感じを受けました。

まさしくいまのような問題を，たとえば商法，証券取引法，経済，あるいはアメリカ史といった人たちが集まって，文学部の学生さんとか，教育学をやろうとしている人に知って欲しい。そういうものに一度も触れないで卒業するのではなく，社会科学的な考え方とか，法学的な考え方とか，制度論的な考え方とか，何も専門知識である必要はないんですけれども，やはりそういうものに触れるだけでも触れて欲しいという気持ちが非常に強いんですね。

特に日本のような企業社会ですと，本当に課題が山積しておりますし，実体は極めてひどい状況ですから。先ほど鈴木先生から「企業社会と豊かさ」というテーマが出ましたけれども，私がいまやるとしたら「企業社会と貧しさ」ということでやろうかなと思います（笑）。両面あると思うんですね。やはり豊かさを展望しますけれども，現実は非常に問題がある。そういうことにやはり一回は触れて欲しいという気持ちが強いです。

私には多少偏見があるかもしれませんけれども，たとえば文学部でずっと文学的なものをやって，ずっと4年間，フランス文学で恋愛論をやったという人がロマンチックな人かというと，そうではなくて，たとえば今の日本のような企業社会で企業社会のあり方についていろいろと何かやろうとするほうが，私は非常にロマンチックな世界だと思っています。つまり，それだけ非常に壁も厚いし，挑戦するものもたくさんあるし，ロマンチックであることはどういうことかということだって，それはその分野それぞれにいろいろあると思うんです。

ですから，そういうものに触れて欲しいというのが，私としては，一般教育に代わる一つの役割だと思います。たとえば法学部の学生は，人文的なものにやはり触れる必要があると思います。

一般教育のあり方がいろいろ批判を

受けて変わってきたわけですが，一般教育のあり方が全部悪かったというわけではない。私も学生時代を振り返りますと，非常に印象に残る授業というのは一般教育の授業が多いんです。

たとえば，私は早稲田出身ですが，最近亡くなりましたけれども，自然科学論で進化論をやっていた八杉龍一先生に習ったんですね。非常に印象に残っています。私は高校から附属高校でロシア語だったものですから，お兄さんがロシア語の先生だったんですが，そういうこともあって……。

それから，哲学は，後でマルクス哲学者だということを知ったんですけれども，寺沢恒信先生で，私も最後までどういう人か知りませんでした。しかし，ものすごく熱心で，口角泡を飛ばさんばかりにしゃべっていまして，ずっと出ておりました。感激して聞いていました。

文化人類学はついこの間亡くなった西村朝日太郎という先生，この人はものすごく怖い先生で，学生が後から入ってくると入れませんし，途中で出ていくと出口までウワーッと追い掛けていってその襟首を捕まえるような先生だったんですけれども，ものすごく印象的だったんですね。

私はいま会社法とか証取法をやっていますけれども，やはり学生時代印象に残ったのはそういうものです。何もそういう人ばかりではない。印象に残る授業というのは人によってみんな違います。熱意が教室のなかにあふれていなければダメということもないと思うんですが。今度は逆に，文学や教育学や歴史をやっている人に社会科学で印象的なものを残してやるというのが，やはりわれわれの役割なのではないかという感じがいたします。

ですから，本当に専門性の高いものの一端に触れるということもいいでしょうし，ある程度総花的なものがあってもいいでしょうし，非常にミーハー的なものもあってもいいでしょうし，いろいろなものがあっていいと思いますけれども，そういう異質な専門，あるいは自分が知らない分野について新しい新鮮な驚きを与えられるようなものが総合科目であり，とりわけ総合Bはそういう役割を担っているのではないかという感じがしております。

問題は，そうなりますと，どういう科目を提示できるか。それはたまたまそれを担当した先生の才覚とか専門分野に拠ってくるだろうと思いますが，今回の総合Bを見ますと，鈴木先生のところの「企業社会と豊かさ」がありますけれども，やはりどうも法・経・政治系が足りないなという印象を持ちます。私は法学部の先生が何年かに1回は半期コマでも担当していただきたい。若干の負担増になるかもしれません。臨時のコマで何とかなればいいですけれども，とにかくそういう負担を課してでも……。

私は辞めてしまったから無責任なことを言っておりますね（笑）。法学部の先生が聞いたら，けしからんと怒ら

れるかもしれませんが，やはりそのぐらい要求する。

それから，それぞれの先生から，自分の専門で自分がやっている研究を土台にして自分が考える総合Bのカリキュラムと講師のアイデアを募集する，公募する。もちろん受講生にも，私が考える総合Bのテーマと講師といったものを大いに公募して，それを取捨選択して需要に応えていくということも必要かなと思います。

私も全カリにおりましたので，先生方皆さんの大変なご苦労をよく知っております。そのうえで無責任に注文をしましたけれども，以上が私の感想です。

佐々木　上村先生，どうもありがとうございました。なかなか貴重な，耳の痛いようなご意見もありましたけれども，続きまして，西平先生，よろしくお願いいたします。

西平　ぼくもやはり立教の全カリはすごくよくやっていると思います。それに関しては全く敬服です。ぼくは去年まで，末端の委員をやっていましたが，それだけでも本当に大変でした。それをここまで打ち立ててこられて，しかも，総合Bには，ずいぶんいろいろな種類があるし，それに関しては本当に敬服です。

特に今日，ああ，すごいと思ったのは，先ほどの服部先生のところ，先生方が全員毎回出席されていた。これはすごいです。リレー形式で1人ずつやる分には，教員は1回ずつ行けばいいわけですが毎回全員が出席する。それはすごいと思います。びっくりしました。

ぼくは国立大学に移りました。まだ移ったばかりで本当はよくわかっていないんですが，今の印象では，学部の学生がほったらかされているみたいで何かかわいそうです。学部生は立教の学生のほうが恵まれていると思います。そうした意味でも，立教の試みはすごいなと敬服です。それがまず前提です。

ところで，複数の人が担当するということですが，ぼく自身はかなり苦い経験があります。立教の教師になって2年目のころですが，文学部の東洋史に上田信先生がいらして，ぼくは同じ年でとても気が合って，特に一緒に酒を飲んで話すととてもおもしろい。学問的な刺激に満ちていて，とても創造的な時になる。こんなにおもしろくなるんだから，それを学生の前でやれば，学生も巻き込んでおもしろくなるに違いないと思いました。それで名乗り出て，2人で毎回授業をやりたいということで，文学部の共通科目というものに出ました。

ところが，飲んでなかったこともあるんでしょうが，うまくいかないんです。やはり2人でやるのと，それを聴いている人がいるというのでは，ダイナミズムが違うわけですね。彼との話に夢中になるのと，学生がどう感じているのかというのと，注意が両方に分

西平　直氏

かれてしまって虻蜂取らず。そう思いました。

結果的には，２人で今日は君が担当，今回はぼくがというときもあったり，むしろ学生を交えてガチャガチャ討論するという形になったり，いろいろな実験をしました。１人ではできないことを，２人だと度胸がつきますから，いろいろ冒険ができる。その意味ではおもしろかったのですが、教師が２人前でしゃべれば学生も巻き込めるというのはうまくいかないというのが実感でした。

先ほども教員相互の関連がどうだったかという話が出ましたが，それは複数担当でやる限り，常に問われてしまうと思います。複数でやれば楽になるかと思うと逆で，むしろよけいにシンドさを背負うように思います。それが最初の出発点です。

立教の文学部にはいろいろな試みがあって，特に集中合同講義のようにいろいろ合宿をやったり，夏休みに通ったり，ぼくも何回か参加をしました。

その都度，おもしろかったんですが，今から振り返って何がいちばんふつうの授業と違ったかというと，いわば待つ時間。たとえば移動時間があったというか，待つ時間を学生と共に過ごしたというか。いってみれば無駄な時間を学生と共に過ごしたというのがいちばん大きかったと思います。

たとえば外へ出てやる。新座でやった時，バスで移動するということがあったんですね。バスで移動する時間は無駄だなと思ったんですが，それは全く逆で，一緒にバスを待たなければならない，一緒に乗っていなければならないという仕方で，学生とそれこそ同じ地平に立った。それがふつうの授業では経験できないことだったと思います。

比喩的にいうならば，やはり教室という空間は，教師がこちらにいて，学生が向こうにいて，向き合う関係になりますが，バスに乗って行くときにはそれこそ同じ方向を向いている。同じ地平に立って同じ時間を共有している。そうした無駄な時間を体験したというのがぼくにとっては大きかったと思います。

そうしたいくつかの経験から，複数でやるということは，教師にとっては教師の教養が問われることなのだというのが，今のぼくが感じていることです。「教養」という日本の日常の言葉には三つの意味があるというか，三つの意味で使われるんだそうです。

一つは基礎という意味。たとえば，ドイツの法律を学ぶ学生にとってドイツ語を学ぶということは基礎知識。その意味での基礎というのが一つの使い

方。

二つ目は幅の広い知識という意味。たとえば化学の先生が『源氏物語』のことを知っているとか，フランスの文学を知っているというのは幅広い知識があるという意味で教養。そういう使い方。

三つ目は，人生観とか世界観にかかわる共通の土俵。ないしは，生活者として，たとえば都市生活者として生活するからには，だれであれ抱えざるを得ない問題。ないしは，人生を歩む者，歩みつつある者として当然共有せざるを得ない課題。その共通の土俵にかかわることが教養という名前で呼ばれることがあるようです。

ぼくが複数でやるとき教養が問われると感じたのは，この第三の意味だと思います。そしてぼくらが問われる教養のレベル，つまり，都市生活者として暮らす限り抱えざるを得ない問題，人生を生きる者である限り抱えざるを得ないその土俵に，学生も引き込むことができたら，そこは学生にとっても共通のはずですから，いちばんうまく交流ができるのではないか。そしてそのときに教員が複数であることの意味がいちばん生きるのではないかと思いました。

以上，複数でやることの意味を何とか言えと言われたら，ぼくの経験はそんなことです。

大きな二つ目ですが，話はちょっと違います。ぼくは立教で教職課程というところの教師でした。つまり，学校の先生になりたいと思う人を相手にする。ところが教壇に立ったわけですが，ぼくはこの人たちに伝えたいと思うことを持っていないというのが強烈な出発点でした。確かに，論文を書くとか，理論を学ぶとか，それを伝えることはできるけれども，今から中学校の先生になる人にぼくが伝えたいことはそれではない。だから，ぼくは教壇に立ちながらも，自分が学生たちに伝えたいことを持っていなかったというのを自覚するのが出発点でした。

ですから，本当に困ってしまった。真っ白になって，困っていろいろ探り求めていたときにぼくが出会ったのは，立教大学でやっているフィリピンキャンプでした。今から思うと，教師として，教育にかかわるときの根っこは，そのスタッフミーティングで身につけたというか，仕込まれたと思います。そのときの問いは，結局，<体験から学ぶとはどういうことか>という問いでした。

ぼくはどうやら学生にかかわりたいと思うとき，知識の伝授をしたいわけではない。いつも体験から学ぶということをモデルに考えているようです。

フィリピンのキャンプで問題になるのは，なぜあなたはこれに参加したいのかという問いです。参加動機を書かせて面接みたいなものをするわけですが，なぜあなたはこれに参加したいのかという点が問われる。出かけてしまってフィリピンの山の中でホームステイするときは，スタッフは何もかかわ

らない。安全であればそれでいい，どうぞ御自由に。そのかわり，帰ってきてから，あれはいったい何だったのかという点をぼくらはまた問い掛けるわけです。確かに楽しかったかもしれない。おもしろかった，新しかった。だけど，いったいあなたにとってそれは何だったか。それを何度も何度も問い掛ける。それがスタッフの役目だとぼくは訓練されました。

そこで問われるのは，体験から学ぶということ。本当にあなたは体験から学んだか。よく学生たちが言います。知識だけでわかっても，本当にわかったことにならない。教室ではダメだ。そのとおりだけれども，では，教室から離れたところで体験から学ぶって，本当に学べるか。そのキャンプでは常に常にその点が問われました。

それこそ先ほど福井君が言っていましたね。毎回毎回の授業のときには聞き入ってしまうので，これでいいかなと思った。楽しかった。だけど，終わった後，何か変な気がする。何か残らなかったような気がする。

まさにそれこそが学生が本当にやるべきこと。つまり，あれはいったい何だったかをいわば最後に問う。その振り返りがものすごく大切だと思います。

振り返りというのは，単なる反省会ではないんです。自分は何が悪かった，ごめんなさいでは全然ない。点数の評価に関係のあることでもない。そうではなくて，体験したことをもう一回自分のなかから出して，いったいあの体験は自分にとって何だったか問い直す。ないしは，半期間，授業を聴いて，あれがいったい何だったかと振り返る。そうしたプログラムが少なくとも体験学習では必要だし，案外キャンパスの教室のなかでのクラスでも，必要ではないかと思っています。

その裏付けはもう一つあります。シュタイナー学校というのが今はかなりポピュラーになっていますが，シュタイナー学校では教科書を使いません。生徒たちは毎回のノートが自分の教科書になるんですが，最初の１ページを空けておくそうです。そして，授業の最後のときにみんなで目次を書き入れていく。目次，要するに何をやったかを書き入れていく。最後に目次をつくって，いわば振り返りをやって初めてそのクラスの１区切りがつくというんです。

ですから，ぼくの気持ちとしては，最初のシラバスをあんなに厳密にするよりも，むしろ最後にみんなで，何をやったか，何が欠けていたか，何だったかをもう一回確認する。いわば最後にシラバスができて，ああ，半期間，こんなことをやったなというのができたらいいな，と思っています。

もう一つ体験からということですが，体験から学ぶ能力ないしはセンスの問題です。ぼくらは学校教育のなかで書物から学ぶということは徹底的に訓練されるわけです。文字を読んで書物から知識を得て，それを評価する。どうやったら書物から学ぶことができるか，

それについてはトレーニングされるけれども，どうやったら体験から学ぶことができるかというのは訓練されないわけですね。にもかかわらず，体験が大切だとか，体験学習とか言われて，ほっぽりだされて，さあ学べと言われたって，困ってしまって当然だと思います。

では，体験から学ぶ能力をどこで磨くことができるかというと，これもやはり体験からでしかないと思います。泳ぎ方を知らないのに泳げというのと同じで，泳ぐしかない。泳ぐしか学び方はない。いくらここでクロールの真似をしてもダメです。そうすると，体験から学ぶということは二つの意味を持つ。ある体験から何かを学びつつ，同時に，体験から学ぶとはどういうことかを学ぶ。

その二つの視点が学生に要求されている。いや，スタッフの側も要求されているということが重要だろうと思いました。

そうすると，同じことはこの総合Bにも言えるのではないか。いわゆる講義形式でない，知識の伝授でない形から学ぶというのは，ただ来れば学べるわけでは全然なくて，この新しい形式のなかで学ぶとはどういうことかをかなり自覚しながら，工夫しながらやらなくてはダメだろう。その意味では常に実験だし，工夫だし，模索だろうと思っています。

それがぼくが体験学習というところから感じることです。

もう一つだけ話します。三つ目ですが，大学の教育ということが問われていて，ぼくもシンドイですが，ぼくはやはりぎりぎりのところで開き直って，「大学だって捨てたもんじゃない」と言おうと思っています。問題点は，いくらでもあるし，ぼくだって自信はないけれども，でも，大学だって捨てたもんじゃないぞと，そこは開き直ろう，踏ん張ろうと思います。

いま多くの学生たちが「自分探し」という，言葉に括られるような期待をもって大学に来ます。自分のことをもっと知りたいとか，自分は何をして生きていくか考えたいとか，何かそんな形で来ます。そのニーズには，やはりぼくは応えたい。もし大学が何らか意味を持つとしたら，その点に関して意味を持ちたいと思っています。

そのときに何ができるかといったら，よくわからないけれども，宙吊りにさせることではないかと思います。学生たちを当たり前の日常からちょっと離してしまう，そこから離れさせてしまう。その宙吊りのまま，あとはどうぞ。

たとえば，いい成績を取って，いい大学に行って，いい就職をするというある一つのコースがある。それがいわば当たり前で，疑問を感じながらもそのコースにそっていくわけですが，本当にそれがいいの？　本当にそれがいい生き方なの？　いい成績を取っていい大学へ行っていい就職をして，本当にそれでいいの？　そういう問いを出していく。そうすると，その問いが本

当に学生のなかに入ったときには，学生は宙吊りになってしまう。じゃあ，どうしたらいいのか，どう生きたらよいのか，それは，ぼくらは与えることができない。いくつかのオルターナティブな生き方を伝えることはできるけれども，あなたがどう生きたらいいかは，ぼくらは伝えることができないわけだから，学生は宙吊りになる。学生にとっては，それは不満なんだけれども，でも，ぼくは，もし大学が意味を持つとしたら，その宙吊りに放っておくことではないか，当たり前の地平を一回離れさせることではないかと思います。

それで，再びその人が，たとえば一流企業に入ってバリバリの商社マンになっていったって，ぼくは全然構わない。だけど，ずっとその決められたコースのなかにどっぷり漬かったまま商社マンになった人と，一回それを離れて見ちゃったことがある人とでは，微妙なところで微妙な違いが生まれるだろうとぼくは期待したいです。

むろん，それだけ本人にとってはシンドイことになって，そんなこと知らなきゃよかったとなるんだけれども，知らなきゃよかったことを伝えるのが，大学の意味ではないか。その意味では，大学だって捨てたもんじゃないと言いたいと思います。

この総合Bでも，たとえば佐々木先生がコーディネーターをなさっている「人権・生命・環境」という形のプログラムとか，「アジアを知る」という形のプログラムとか，まさにその試みをなさっているんだなと思って，改めて敬服です。

以上です。

III 討　論

佐々木　ありがとうございました。これで一通り全員にお話をちょうだいしたことになります。各先生，それぞれご自分の授業の体験から，全カリにとって非常に重要な問題を，ある場合には厳しく，ある場合には温かく語ってくださったと思います。

学生さんは，先生がこんな思いで授業をやっているんだと聞く機会はあまりないと思います。ここで，ぜひ壇上に上がっていただいている学生さんに，先生の思いを聞いて，いまどんな気持ちでいるか，一人ずつ簡単に聞いてみたいと思うんですけれども，いかがでしょう。本間君から順にお願いしましょうか。

本間　一つ思った点は，いまの西平先生のお話から，大学へ来て何を学ぶかということが十分理解できました。ぼく自身も，これといった目的があって大学に来たわけではなくて，やはり大学から何かを得られたらなという思いで大学に入ってきたんですけれども，やはりそこから何かをつかんで，それで卒業していきたいと強く感じました。

でも，やはりそこで大切なのは自分自身で努力しなければ何も得られないのではないかと思います。こういう総合B群のような，いろいろな教養を与えてくれる授業を通していろいろな教養を身につけたり，いろいろな人と知り合って，仲間からいろいろなことを教わるといったことは，その人自身の努力と自覚にかかっていると思いました。だから，やはり自分からうごいていかなければ何も得ることはできないと思いますので，受け身だけでなく，いつも自分から何かをつかみに努力していきたいと強く感じました。

佐々木　ありがとうございました。福井君はいかがですか。

福井　先生方もたくさんいろいろなことを考えていらっしゃるんだなということがよくわかりました。

先ほど「メディアとスポーツ」のことで，ちゃんと3人の講師の先生方がいろいろ連絡をとり合っていたということを聞いて，申し訳ないことを言ったなと思います。ちゃんと沼沢先生が中を取り仕切ってやっていらっしゃったということを聞いて，よくわかりました。

ぼくも正直いって，大学に入ったのは，やはり意志薄弱なところがあって，何となくみんなが行くから大学に入ったみたいな感じがあって。でも，実際に入ってみると，ぼくよりもっと意志薄弱な人が多くて，それでむしろ安心したというか。ちょっとまずいかなと思ったりもしたんですけれども，やはりどうしても，特に大教室の授業などだと聴く側で受け身になりがちで，積極的にかかわるというよりも，出席していちおう話を聴いてテストを受けて，もしくはレポートを書いてというように，だんだん自分の心のなかでベクトルがマイナスのほうに動いてしまいます。やはりせっかく大学に来て高い学費も払っていろいろなことを学べる環境にいるのだから，まだ大学2年なので，今からでも，これからもっともっと積極的に気持ちを切り替えて学んでいきたいなと思いました。

佐々木　ありがとう。少し優等生的なお答えかな。教師にはありがたいお答えなんですけれども，竹内君はいかがでしょうか。

竹内　大学に入る前に，やはり高校と違うところ，自分でものごとを学んでいくという姿勢が必要であるというのはわかっていたんですけれども，やはり入ってみると，そういう意識が足りない。でも，みんなも同じような感じだから，今まで何となく過ごしてきたような気がします。先生方のお話を聞いて，また改めてそういう姿勢が必要とされているということを意識していこうと思いました。

佐々木　ありがとう。ちょっとこだわるようだけれども，司会者の特権で

もう一つだけお願いします。いま大学に入って授業を聴いて，おもしろいですか，心がわき踊るような体験が授業でありますか。一人ずつあるかないかでいいですから，簡単にお答えいただけますか。

竹内　ある授業もありますけれども，そうでない授業のほうが多いと思います。

福井　どちらかというとないに近いですけれども，でも，今年になってから……。去年，ぼくは一般教育課程を受けたんですけれども，特に一般教育課程のときはよくありがちに，サークルの先輩と一緒に履修を組んで，これが取りやすいよと聞いてそれを取るというようなことをやって，なかには本当につまらない授業もあったということがあったんです。今年は，ぼくはちゃんとシラバスを読んで，自分で決めたんですね。だから，なかには，もちろんだれとも一緒に行かずに１人で聴いてというような授業もあるんですけれども，今年になってからは，わりと楽しい授業が，特に一般教育で増えたような気がします。特に総合Ｂの「メディアとスポーツ」も本当によかったし。

だから，総合Ｂというのは，これから持っていき方によってはとても中身の充実した，学生からも楽しい，参加したいという授業になっていくんじゃないかなと思います。

佐々木　本間君，いかがでしょう。

本間　ぼくも春の段階で全学共通カリキュラム，どれを履修するか，やはり履修要項をいろいろと読んで，それで考えたんですけれども，やはりぼく自身の興味に合っている授業がいくつかあったので，それを前期と後期に分けてとってみたんです。

佐々木　それでは，服部先生はいかがですか。

服部　お２人のお話を聞いていて感じたことを，まず１点ずつ言おうと思います。

上村先生がおっしゃたことで，他学部の学生にさまざまな違う観点からという場合に，では，カリキュラム的にはどうなるのか，あるいは，今年度開講された総合Ｂについては文学部が多い。学部持ち回り的なことは本当にそれでいいんだろうかということを考えると，たまたま今年取った学生は文学部の先生を中心として考えられた講義が多くて，来年入ってくると経済が多くてとか，そういうものでいいのだろうか。つまり，学部それぞれ教員の数に応じてそういう科目群をつくるべきではないのか。それが総合大学としての役割だ，ということを上村先生のお話を聞いて感じました。

次に，西平先生のお話を聞いていて感じたのは，複数で教える場合，別に

一致点は見つけなくてもいいわけですけれども，やはりそれなりに学生に対する教育効果を上げていくには，よりもっと打ち合わせ，あるいは仕掛けというものが必要だということを強く感じました。確かに問題意識は，お互いにここととここは違うんだとか，それぞれ何回かやっているうちにわかってきたので，何とかできるかなと思いましたけれども，基本的には，このキーワードを基にとか，そういう形でちょっと密にやらなければ，学生に飽きられていく。あるいは何だったのかわからないということになっていく。そういうことで，せっかくの総合Bのよさ，複数教員が担当する，そして外部講師との連絡などで，確かに沼澤先生がものすごく苦労なさって，打ち合わせをしたつもりだったんですけれども，よりもっと必要なのかなと感じました。

佐々木　では，鈴木先生。

鈴木　こういう機会はなかなかないので，せっかく出席している3人の学生諸君に聞いてみたいことが，担当者としてはあるんですが，だれかがおっしゃっていたように，後ろのほうでざわざわしている。それから，意志薄弱でおもしろいと思っていてもなかなか来なかったり，あるいは途中で帰ってしまったり。これは話す側あるいはコーディネートする側としてはすごくやりにくいんですね。非常に集中力があって，好奇心も豊かでという学生はたくさんいます。だけど，その一方で，何だ，きょうは出席とらないのかというような学生もやはりたくさんいるんですね。

それはみんながいちばんよく知っていることで，そういう学生について，ぼくは，前期はわりと出席をきちんととっていました。そういうものも成績に反映させてきたつもりなんですが，後期は一切とらないでいるんですね。何人かの学生に出席どうするって聞くと，やる気のある学生に限って，いや，出席はいいですと答えるんですよ。何人かに聞いて，どうもそういうニーズがあるのかな，と。要するに，やる気のある学生は，出席だけとりに来る学生には来て欲しくないのかなという気もするんです。

みんな自身はどういうふうに思っていますか。それは毎日のことだと思うんですけれども，ぜひ聞きたいんです。本間君からお願いできますか。

本間　正直なところ，ぼく自身もやはり意志がけっこう弱いところがありまして，やはり出席とかではなくて，本人の意志とあとは学びたいという気持ちだと思います。出席をとるからそれで授業に出てくるようにとがんじがらめにするのではなくて，やはり本人の自覚を第一にして，出席とかで縛りつけるシステムは，ぼくはあまり好きではありません。

福井　教科によるんですけれども，

興味があるというか，聴いていて楽しいとかやる気が起きてきた講義に関しては，出席うんぬんは関係なくて，話を聴きたい，その授業に参加したいという気持ちが強いので，あまり出席など気にならないんですけれども，あまり興味もわかない，だけど単位は欲しいとなると，たぶん出席が評価に反映されるであろうからやはり出席にこだわるというようになってくると思います。ぼく自身，出席がどうのこうの，あまりそういうのにはこだわりたくないんですけれども，やはりぼくも人間だから弱いところもあって，出席さえ出しておけば何とかなるかなみたいな気持ちもあります。やはり本当にその講義を聴きたいとか，そこから何かを学びたいとなれば，出席うんぬんを気にしなくなるんじゃないかなと思います。

竹内　すごく勝手で，たぶん正直な意見だと思うんですけれども，自分の受けている授業のなかで，すごく聴く授業と，聴くけれども難しくてわからない授業というのがあって，すごく聴いている授業は別に出席などとらなくてもいいというか，出席目的で来ている人にはやはり腹立たしい思いがするんです。でも，聴いていてわからない授業とかは，やはり出席点というんですか。それがあるとまあちょっと助かるかなという思いがあります。

佐々木　ありがとうございました。ほかの先生方で，学生さんに聞いてみたいことはありますか。よろしいですか。

それでは，フロアにおみえの方，残念ながら学生さんは少なくて先生方が多いんですけれども，職員の方でも結構です。全カリ開始後のこの半年を見て，特に総合Ｂ関係で何かご意見があれば，あるいはこういううわさを聞いているんだけれども，本当だろうかみたいなことがありましたら，遠慮なくここで明らかにしていただきたいと思います。いかがでしょうか。

意見　法学部の学部生です。ぼくは社会人を経験して来ているので，今の18歳，19歳，20歳前後の人とはちょっと……。世代が違うので，考え方が違うかもしれないんですけれども，きょう壇上には，佐々木先生の総合Ｂに出ていらっしゃる方がいないですね。ぼくは前期は佐々木先生の授業が終わってから服部先生の授業に行くという形をとったんです。

ただ，届出に関して，総合Ｂ群については，単位に換算されるものは前期なら前期で一つしか取れない。ぼくはそれはちょっと何かお役所的だなという感じが非常にして，服部先生がやっている授業と，佐々木先生がやっている授業では全然違うわけですから，一つしか取れないというのは，ちょっと正直いって何でかなという感じがしました。それでどちらを取ったかというと，両方ずっと出ていたんですけれど

も，ただ，佐々木先生のほうの授業がいちおう振り分けで２年生以上の人間には自然科学として割り当てられていたので，とにかく自然科学は早く終わらせたいと思って，佐々木先生のほうを履修して，服部先生のほうはずっと出るだけという形をとりました。

だから，それはちょっと考えて欲しいな，と。そういうことで総合Ｂ群を一つしか取れなくて，もう一個取りたくても取らなかったという学生が，ぼくの周りにもけっこういるので，それは考えていただければなと思います。

あと，服部先生の授業に出られた方は２人いらっしゃるので，佐々木先生の授業に関していいますと，毎回，非常にエキサイトしていまして，前期の印象では，毎回，ぼくはキリスト教学科の金子先生とけんかしていたというイメージが強くて……。

途中で金子先生に「揚げ足を取らないでいただきたい」とぼくが言ったら，「あなたは自分が議論に負けそうになると揚げ足を取るなという言い方をしていますが，それはよくないと思います」と１年生に突っ込まれたんですけれども。

そういった意味では，ぼくに突っ込んでくれる学生もいましたし，もしかしたら見ていて見苦しいと思った人もいるかもしれませんけれども，自分としては非常に得るものがあったと思います。

ただ，私は年齢がもう30歳にいっていますから，ちょっと学生さんとは違う感覚なのかもしれませんけれども，やはり言い出しっぺといいますか，前期なら前期，後期なら後期で，最初に突っ込むというのは，たぶん学生さんにとってはけっこうつらいだろうなとは思うんです。１人手を挙げて話し出すと，みんなが発言を始めるということを非常に感じました。

だから，これは冷静に見て言うんですけれども，総合Ｂ群だったら，先生方が１人学生に目をつけて，サクラ的な人間を出してやるといいのではないか。ぼくはサクラに徹しようと思ったので，それがいいか悪いかは別として，サクラとしては前期はうまくできたかなと自分では思っているんです。だから，１人サクラ的な人間をつかまえて，議論を盛り上げていくというテクニックも，先生方にあっていいんじゃないかなという感じがしました。

勝手なことを言ってすいません。

佐々木　ありがとうございました。今の発言者は前期ぼくの授業に出てくれて，非常に積極的にやってくれたので，授業の運営が助かったという事実は確かにあります。後期の場合には，彼のような学生がちょっと少ないものですから，こちらのほうがいかに学生を怒らせるかでちょっと苦労しているようなところもあります。

それから，いま総合Ｂは１学期に１科目しか取れないのは不備であるというご意見がありました。これは理由があってそのようにせざるを得ないので

しているんですけれども，将来的に検討を続けていきたいとは考えております。

ほかにどなたか。では，上田先生。

上田　「進化」と「人権・生命・環境」と，二つの総合Bにかかわっている理学部の上田です。ぼくが総合Bにかかわって，一ついいなと思ったのは，やはり何人かの先生がおっしゃいましたけれども，複数の先生方が一緒になって講義をするということです。「人権・生命・環境」では金子先生と佐々木先生，両方ともうるさい先生です。おそらく暗い青春（？）を送られた先生だと思いますけれども（笑），非常にうるさくて，おもしろいんですね。人が話していたら，突っ込みがパッと先生方の間からも入ってくる。これはぼくらにとってすごく新鮮な感じだし，おそらく聴いていた学生も新鮮だろうと思います。

ぼくは教え方がそんなに上手じゃないと知っています。やはり大学の先生というのは，どちらかというと教え方は下手なんですよね。はっきり言わせてもらえば。ところでここにいる大学の先生で小学校，中学校，高校の教員免許を持っている先生が何人おられますか。……。ハイ，これぐらいおられたらまあ立派だと思いますけれども，意外と少ない。ここに来られている先生方の中にはわりと多いかと思いますけれども，ぼくは理学部でしょう。自然科学系の先生は，やはり自分の専門の研究というか，生物学とか物理学とか化学とか，そういうのは一生懸命やってきたけれども，教え方が上手とはいえないという感想を持ちます。そういうときに，本当はいい先生なんだけれども，教え方が上手じゃないので学生にばかにされてしまうという側面ね。そのへんでもやはりもうちょっといろいろな先生方がいていいと思います。

教え方が上手になるというのは，単にテクニックを学べという問題ではないんです。教え方の下手な先生もどんどんどんどん総合Bに引きずり出してきて，何人かで一緒に講義をしていけば，先生全体の教え方の質が非常に向上すると思います。

総合Bでは，ぼくは別の授業もやっているんですけれども，そこでは他の先生の講義に参加する人もたまにはあるんですが，どうしてもリレー式になってしまうということです。それぞれの先生が自分の専門分野にかかわることで，それなりのしっかりした話をされるわけですけれども，総合Bはやはりリレー式の感じになってしまうとダメだな，先生方のディスカッション，先生方同士のお互いの学び合い，学生と先生の学び合いといった側面がなければダメだなと思います。

佐々木　ありがとうございました。ほかにどなたか。壇上のわれわれに聞きたいということでも結構なんですが。では，沼澤先生。

沼澤　「メディアとスポーツ」のコーディネーターをやりました沼澤です。総合B群で何かやらなければいけないというときに「メディアとスポーツ」という授業を考えたんですが，ほかの大学の先生に，いちばん先に言われたのは，「私立の大学だから総合Bという複数教員が担当できるような科目ができるんだよ」ということでした。立教大学は私立の大学なわけで，それだったらその利点を最大限に生かしてやろう，大学の授業らしくないというか，大学の授業で今までやっていなかったことをやってみようということで，ある意味では無謀だったかもしれないんですが，4人の先生方に全部の時間来ていただきました。

それから，スポーツについて，多くの分野の方，特に実践をされている方に実際に来てもらって話をしてもらうということを大学の授業でやっているところは，たぶんあまりないと思います。そういう意味で，マスコミに出ている有名な方を呼んだということもあるかもしれませんけれども，学生の求めているものに少し応えられたのではないかとは思っています。

きょうのシンポジウムは「全カリ・総合Bの可能性を探る」ですので，一つ申し上げたいのは，学生の評価のことをもう少し考えなければいけないのではないかということです。

今回「メディアとスポーツ」は714人という大勢の学生が履修したわけですけれども，出席の問題とか，大教室の問題で私語が多くなるとか，いろいろ大学で行われている授業の悪い部分がやはり出てきてしまったので，それをこれからどのようにするかということなんです。授業をやっていて，これをだれが評価するのかなと思ったら，ちょっとうろたえました。

出席をとってみたり，いろいろな試みをしたわけですけれども，総合B群は，自分で考えていくというような科目が多いわけで，試験にはちょっと似つかわしくないかなということがありましたので，この科目もレポートを書いてもらうということで評価をしました。600人近くのレポートを読むということ自体も大変なんですけれども，それよりも，まず第一に，レポートで評価していいのかどうかということがあると思うんです。いっそのこと，単位は全然関係なくした科目があってもいいんじゃないか。本当に学生が聴きたくて来るのだったら，そこまで取っ払ってしまえば，また何か新しいことができるかなということも少し考えました。

今回，あまり履修者が多かったので，私語が多いということもあったんですけれども，来年度からは前期・後期，やることになりました。やはり来年が本当のこの授業の評価ではないかと思っています。今年の授業の内容から来年学生がどのように反応してくれるか，見てみたいと思っています。

ですから，評価のことについては各先生方，お考えがあれば，ちょっとお

聞かせいただきたいと思います。

佐々木　ありがとうございました。いま評価の仕方についてご意見というか，疑問というか，非常に重要な問題が出ました。では，鈴木先生，お願いします。

鈴木　いちばん難しい質問です。先ほど申しましたように，前期は出席をかなり綿密にとりまして，レポートも４～５回，それを総合評価としてやりました。そのよくない面も，とにかく私語はルール違反だから一切禁ずるということで，かなりしつこく……。教室はだいぶ静かだったと思いますけれども，それでもやはり明らかにやる気がないなという学生がずいぶんいました。そういう学生と，本当に毎回フロアから質問してくるような学生と，どうやってレポートで見分けるのかというのがちょっと大変でした。

それで，姑息な手段かもしれませんが，フロアで質問してくる学生が毎回３人ぐらいいたんですね。別々の人です。そういう人は出席票とかレポートの名前のところを丸で囲んでもらって，そういうもので点を加味したりしていました。

後期は，教室を静かにするといったことに，こちらもだいぶ年のせいか疲れてきまして，いろいろ学生と相談したら，とにかくうるさい学生，全然聴いていない学生，来ても出席票だけ出して帰っていく学生，そういう人たちはいやだということがだいぶ意見として出てきましたので，では，実験的に，とにかく出席はとりませんよということで全然とっていないんです。

でも，ずいぶん出てきています。７割から75％ぐらい出てきていますので，それはそれでよかったのかなと思っています。ですから，25％ぐらいは評価の対象からすればＣなりＤなりをつけなければいけないんですけれども，それをレポートからどうやって読み取るかというのが，いまいちばん頭が痛くて，どうしようかと思っているところです。

できるだけ適正に，ちゃんとした学生にはちゃんとした点をと。そうでないと，悪貨が良貨を駆逐してしまいますので，やろうと努力はしています。

服部　ぼくは個人的に，採点をしなくていいということで参加した部分があるわけで，実際に学生を見たときに，さらにはレポートの山，あるいは研究室で沼澤先生が整理しているのを想像するだけで，もう大変だなと思うわけですね。確かに700人前後の学生のレポートを読むというのは大変な作業ですし，それは答案でも同じだと思います。

だから，全カリの成績のつけ方は，本当に真剣に考えていかないと，結局，学部持ち回りとか，いろいろな科目になってくるでしょうから，そのたびに悩む先生が出てくるだろうと思います。そのために，マークシート式がいいの

か何なのか，よくわからないんですが，採点の部分は簡便な方法を何か考えないと，これは本当にえらいことになっていくだろう。

だいたいの科目が300人前後の履修者がいる。そうすると，そのうち何割かが妨害者であるという部分がありますよね。ぼくも，あるいは西田さんも，この授業はスポーツのルールを重んずる授業なんだから，ルールとして静かにしろなどということを何回か言わなければいけないことになったのかを考えていくと，学生同士の間で，後ろは後ろ，前は前みたいなことになってしまっている。決して出席を重んじた授業ではないわけなんですが，どうしても来てしまう。これからの学生は，どんどん来てしまう学生が多いと思うんです。それが少ない教室だと追い出したりできますけれども，ここの大教室になると，できない。

全カリの総合Bとして何か統一した方法ができればいいなと思います。それがあれば，コーディネーターの先生がより内容に力を注げるということにもなるんじゃないかと思われます。

佐々木　ありがとうございました。実は私も「人権・生命・環境」というのを一つやっています。前期は90名から100名ぐらいの学生だったと思うんですが，常時出席しておりまして，われわれの場合には，人権委員会と学生部セミナー「環境と生命」の講演会や催しに最低二つ以上出て，それについて１週間以内にレポートを書いて出すということをまず最低条件にしてやっていました。

そうすると，講演会その他，ずいぶん回数が多いですね。５～６回あるわけですけれども，そのたびに数十枚のレポートが出てきます。それを即座に全員で読んで，次のわれわれがする共同講義のときに，この前のレポートでこんなものが出たけれどもとか，この前の講演会ではこういう話が出たけれどもということを話題にしながらやるんです。ですから，常に臨機応変に授業に対応するという姿勢を要求されるので，準備のほうはけっこう大変でした。

最終的にはやはりレポートにしました。それも最後の授業で，討論会ですけれども，学生に自分で書きたいテーマを言えと言わせて，みんなにテーマを決めてもらって，１日以内に書いてくるという，そういうレポートをやりました。100人ぐらいの学生でしたから，何とかそれでもできたかと思いますけれども，ちょっと負担はありましたね。

ただ，そういうなかで，われわれとしてはＡＢＣというようなランクをつけるのに意味があるかどうかということについては，やはりずいぶん考えさせられました。ぼくらは実際，ふだんの授業で発言の多い学生は，実はちゃんとチェックしておりまして，所属と名前を言わせていますから，そのたびにチェックをしました。発言が多かっ

た者、あるいは内容がしっかりしていた者については評価にいちおう反映させるように密かにやっていました。学生にはあまりそれはおおっぴらにしていなかったんですけれども，それはやっていました。それと，ふだんのレポートで、講演会などを聴いた感想ですけれども、非常に抜きん出たものはやりチェックして，そういうものを加味して、総合的に最後のレポートのＡＢＣＤにプラスαをして、成績評価をつけたんです。

それでも，ふだん積極的に参加している学生についてはＡなりＳなり，当然だなとつけられるんですけれども，そうでない学生のＢ，Ｃに関しては，やはりかなり悩みますよね。しかも，科目の性格上，何か知識を身につけるということではないんです。いろいろな体験をして，そのなかで自分が何をつかんだか。１年生は無理ですけれども，特に３～４年生の場合には，できれば自分の学科で勉強してきたことと関連させて意見を展開して欲しいというつもりでやっているわけです。それをＡＢＣで評価するというのは，はっきりいってなじまないんです。

今の制度上，ＡＢＣをつけなければいけないので，無理につけましたけれども，合否だけでいいのではないかというような意見も出るんです。アバウトでいいんじゃないか。あるいは，沼澤先生のように，もう単位に関係なく，聴きたい学生だけが楽しむ。学生と教師が一緒に楽しむ，盛り上がる，そういう授業でもいいじゃないかという考え方もあり得るとは思います。それが文部省に支配されている現在の大学の制度になじむかどうかということになると，ちょっと難しい問題も多々あろうかと思うんですが，総合Ｂはそこまでいっている科目だということは言えるかと思いますね。

以上が，私が個人的に科目を担当した印象です。

あとお一人，お二人，ご質問やご意見がありましたら，ぜひお聞かせいただきたいんですが。

意見　法学研究科の学生です。顔見知りの先生がずいぶんいらっしゃるので，少々きついことを言うのは問題かと思いますけれども，ずっと立教大学の法学部から今まで６年間来て感じ続けていることはただ一つです。それは，あらゆる意思決定に学生の意思が反映されない制度になっているということです。一つコンピュータのことをとっても，図書館のことをとっても，カリキュラムのことをとっても、すべてにおいてそうです。

私が大学に入学してきたときには，大学生活に対して希望と期待に胸を膨らませてやる気満々だったんですけれども，半年もたたずに，大学っていうのはこんなものなのかと大きくやる気を削がれて，がっかりした経験があります。そこから足を棒にしていろいろな講義を回って見つけた先生が佐々木一也先生だったりして，佐々木先生の

講義はもう５回聴いているという変わり者です。

今回はカリキュラムの問題に限定して述べますが，金融ビッグバンと言われるのと同じように，カリキュラム・ビッグバンが必要だと思います。フリー，フェア，グローバル，この理念に基づいて行われているのと同じように，やる気のある学生は無限にそのやる気を引き出すことができるようにするべきです。あれを取ってはいけない，これを取ってはいけない，何十単位以上取ってはいけない，ぶつかっていたらこうしなければいけない，ああしなければいけない。あれこれ足かせをはめるから，先ほどの方が言ったように，連続して総合Ｂが取れなかったとか，法学部の科目と重なっているので青島さんの講義が聴けなかったという学生もたくさんいます。

私も語学のときに専門の科目でどうしても聴きたかったものがあったんですけれども，出席をする語学とぶつかってしまって，ついぞ聴けませんでした。その先生は翌年から立教を出られてしまって，もう永遠に聴くことができなくなってしまったという経験があります。

ですから，カリキュラムの問題についても，何についても，常に学生の意思を汲み上げていくチャンネルをつくっていただきたいと思っているんです。そうでなければ学生が何を考えているのかがわかろうはずがありませんし，瑞々しい学生の学ぼうという意欲を削いだまま走ってしまうことになるのではないかと思うんです。

このシンポジウムだって，結局，学生として参加しているのは彼と私の２人だけじゃないですか。非常に貴重なチャンスだと思いますが，いってみれば立教に長くいる私と，社会人入試で入った方以外の意見というのがもっともっとあるはずです。

佐々木　ありがとうございました。学生の意見反映というのは，こういう場もそうなんですけれども，われわれが設定するような場では学生はしゃべりたくないのでしょうかね。学生が設定する場というのはどうなんでしょう。

たとえば文学部では，文学部集会というのが毎年行われていまして，「来年度のカリキュラムはこういうふうにやるけれども，学生はどう思う？」という会をやります。来週ですかね。文学部はやります。

ただ，それも相当宣伝して，ゼミなどでビラを配って，「君たち来いよな」と言わないと，学生が集まらなくなっているという現実もあるんです。ここ２～３年はその動員が功を奏して少し学生がにぎやかに来てくれて，教師が喜んでいるという，歪んだ姿があるんです。本当は，学生がたくさん来ると，教師は恐怖に震えなければいけないはずなんですけれども，そうではない。そういうことがあったりします。

これはだれが悪いということではないと思うんですけれども，少なくとも

佐々木　一也氏

全学共通カリキュラムの総合Bに関しては，学生さんを刺激して，一緒に考えようよ，一緒に体験しようよということをやっています。その趣旨をわかってくれている学生さんも少しずつ出てくることを期待しています。そういう努力を地道に続けていくことによって，学生が大学にシラけてしまうといったことも是正されていくのかなと思います。

われわれの努力が今まで足りなかったという批判はあるかと思います。特にそれに対して抗弁するつもりは，私もありませんけれども，これからの努力も見て欲しいとだけ申し上げておきたいと思います。納得していただけないかもしれないけれども。

では，いかがですか。濁川先生，お願いします。

濁川　「体験学習－環境と人間」という学生数のすごく少ない割には教員が3人もいて，お金をいっぱい使っているような授業で，最後にここで何か一言アピールしておかないと，そのうちつぶされるのではないかと思いますので，発言したいと思います。

先ほど沼澤先生が評価のことをおっしゃったんですけれども，それはぼくもすごく悩んだ点で，授業が合宿形態で，4泊5日一緒にやってしまうものですから。カヌーなどに一緒に乗ったりしていると学生と非常に仲良くなってしまうんですね。仲の良い学生には，どうしても良い成績傾向がある。それはいいことではないというのは重々承知なんですけれども。

先ほど西平先生が体験学習はいいことだとおっしゃいました。ぼくもそう思うんですけれども，皆さん同じように4泊5日，それぞれ自分の力のなかで体験してくれているので，これはもう成績は区別しようがないなと悩みました。ただ，レポートを何回か出してもらったので，それを基に若干差をつけたという部分はあります。

先生方の総合Bへの考え方など伺って，ぼくは自分のことしか知らなかったのでたいへん参考になりました。そこで，自分がどのような考え方でやっているかということもちょっと言っておきたいと思うんです。

立教大学の教育というのは，どこかで見たんですが，専門性を兼ね備えた教養人の育成とか，全人教育みたいなものが大事だということですね。これは何も大学だけではなくて，ご存じのように，今は小学校とか中学校のカリキュラムの改訂をやっています。そのなかで，二千何年ですか，小学校ですでに「総合」などという授業をやろうという流れになっています。それこそ

総合Bに似たような，いろいろな分野を統合する授業。いろいろなところでやっているでしょうけれども，そういうものを大学のなかでやるということは，まさに時代のニーズにはぴったり合っているいい企画だと思います。

どんなに専門的なことを知っていても，たとえば自分の授業で何なんですけれども，川が汚れているとか，河川がこのようにしているとダメになるんだと解っていても，外から見ているだけでは解らない。実際に自分が川のなかに入らないと解らない。そういう時に，しかし，カヌーのノウハウがないと思ったところへ行けない。だから，やはり机の上だけではダメで，そういうノウハウも必要になるだろう。

あるいは，川を見て，なぜこの川は汚れているんだ，なぜこの川はこんなにきれいなんだ。すごく澄んでいて，ミネラルウォーターぐらい澄んでいて飲みたいような川の水でも，石をひっぺがしてなかの水棲昆虫，いわゆるカワムシを見てみると，カワムシの種類によっては，これはかなり汚れている川だと解る。ゴルフ場が上にあるような川は，どんなに澄んでいてもまず，飲めない水です。そういう知識とか，専門だけでなく，隣接するような部分の知識が一緒にならないと，現実場面ではあまり役に立たないというケースがいっぱいあると思うんです。

そういう意味では，総合Bはまさにそれだけで完結型。学生さんは取りようによっては，A群のなかからそういう組み合わせで取れるというコンセプトで始めたと思うんですけれども，それはやってみないとわからないですし，それぞれ一つひとつの科目が関連性をそれほど持っているわけではないので，なかなかうまくいかない。そういう意味では，総合Bはそれ一つで完結型で，考え方をきちんとしていれば，非常にいいんじゃないかと思います。

それから，ぼくの授業でどうしたらいいのかなとすごく迷うのは，人数制限科目なので，その40人という学生をどう選ぶかということです。実は私の教室にも，40人のところ二百何十人も来ました。でも，あの方式だとそれを一瞬にして選ばなくてはいけないということで，くじ引きみたいな結果で選んだんです。いろいろな学生さんが集まってくれて，それはそれでよかったと思うんですけれども，そのへんはまだ考える余地があるんじゃないかと思っています。

佐々木　どうもありがとうございました。予定していた時間を若干過ぎましたが，最後にまとめをしておきたいと思います。

突然でまことに心苦しいんですけれども，上村先生，この一連の話を聞いて，最後に何かご感想がもしありましたら一言お願いいたします。

上村　おもしろい授業，つまらない授業，つまる授業，血わき肉踊る授業，踊らない授業。学生のほうから見てこ

れはつまる・つまらないと言うんですけれども，つまる・つまらないがそもそも判断できるのかと教師のほうは思うわけですね。ピアノを習ったって，基礎はつまらないし，何をやったってつまらないわけで，高校を出てつまるはずがないじゃないか。つまるはずがないのが前提で何か勉強して，そのうえで本当のつまるがわかるんじゃないかということですから，本当は教師の側で学生に言いたいことは山ほどある。そうはいっても，これだけ大衆化された大学ですと，そんなことを言っているとだれも来なくなります。だから，教師のほうから手を差し延べてやっている。

しかし，なかには出席も少ないし，地味な教え方をしているし，テーマも地味だし，教え方も下手な先生が教えている。だけど，教師のほうから見て，これは珠玉のような総合Bであるというものをやはりいくつか残していっていただきたいなと思いますね。

佐々木　ありがとうございました。きょうのシンポジウムも，総合Bをテーマにしたものにふさわしく，非常にバラエティに富んだ観点からこの授業についていろいろ検討ができたのではないかと思っております。こういうことが可能になりましたのも，やはり全学共通カリキュラム運営センターという新しい組織ができて，全学部支援で行うという原則が少しずつ浸透しつつあるからかなと思っております。これが今後とも順調に，もちろん順調といいましてもそのなかにはいろいろな軋轢・苦しみが含まれているがゆえに順調であろうと思いますけれども，そういう過程を経て，大きく育っていくように祈りながら，本日はおしまいにしたいと思います。

皆さま，ご参加，どうもありがとうございました。先生方もどうもありがとうございました。(拍手)